

Title	現代中国語の移動を表す述補構造に関する研究
Author(s)	島村, 典子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54305
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	嶋村典子
博士の専攻分野の名称	博士(言語文化学)
学位記番号	第24057号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	現代中国語の移動を表す述補構造に関する研究
論文審査委員	(主査) 言語文化研究科教授 杉村 博文 (副査) 言語文化研究科教授 杉本 孝司 言語文化研究科教授 小矢野哲夫 言語文化研究科教授 古川 裕 関西大学文学部教授 内田 慶市

論文内容の要旨

空間移動は人間の最も基本的な活動の1つであり、世界の諸言語には移動事象を表現するための様々な言語形式が存在する。また、言語における移動表現は物理的な空間移動を表すだけではなく、状態変化やアスペクトといった時間領域における抽象概念に拡張するという点でも重要な役割を担う。そのため、ある言語における移動表現を把握することは、その言語における抽象概念領域の表現体系を理解することにも繋がると言える。

現代中国語には述語動詞と方向補語から構成される述補構造という統語構造が存在する。当該の構造は事物の様々な空間移動を表すのに多用される極めて生産性の高い構造であり、述語動詞によって表される付随イベントと、方向補語によって表される移動イベントが有機的な意味関係で結合し、複雑な移動イベントを形成する。本博士論文は移動を表す述補構造を、中国語独自の個別言語学的視点及び世界の諸言語を視野に入れた類型論的視点から考察することを目的とする。

まず個別言語学的に見た場合、移動を表す述補構造の構成要素のうち、方向補語については各方向補語の方向義に関する意味的研究や方向補語の拡張システム等、近年でも様々な角度からアプローチが行われている。一方、述語動詞が表す意味についての体系的な記述と分析を行った研究は少なく、述語動詞が表す意味の類型についてはまだ十分に論じ尽くされたとは言えない。しかし、述補構造が表す移動イベントの類型を包括的に捉え、その全体像を把握するためには、述語動詞の表す意味についてのより詳細な記述と分析が必要不可欠である。以上の理由から、本論では述語動詞に主眼を置いた一連の考察を行った。本論の最も大きな関心事は、当該述補構造における述語動詞がどのような意味を担い、述語動詞と方向補語がどのような意味関係で以て結び付いているのかを考察し記述することにある。これは移動を表す述補構造という1つの形式に表現され得る意味関係を考察することであり、形式と意味のインターフェイスに関わる問題である。

本論は更に類型論的枠組みを用い、多言語からの視点を織り交ぜて中国語の移動表現の特徴を考察した。Talmy1991、2001によると、世界の諸言語は移動の「経路」(Path)を文の主要動詞(main verb)で表すか、それとも動詞語根と姉妹関係をもつ付随要素(satellite)で表すかによって「動詞枠付け言語」(verb-framed languages)と「付随要素枠付け言語」(satellite-framed languages)に分類される。Talmyの分類において、中国語は典型的な付随要素枠付け言語に位置付けられているが、この分類の可否についてはいまだに見解が一致していない。本論は先行研究における様々な主張を分析し、中国語がどのタイプの言語であるかを考察した。また、中国語の移動表現の特徴をより明確に示すため、英語及び日本語の移動表現との比較対照を行い、その共通点や相違点を指摘した。

本論は考察にあたり、移動を表す述補構造で表される移動イベントを3つのタイプに分類する。移動イベントは、移動が移動主体内部の力や原因によって引き起こされるか、それとも移動主体以外の外部の力によって引き起こされるかによって、「自律的な移動イベント」と「使役移動イベント」に分かれる。自律的な移動は、移動が移動主体の意志によって行われるか否かによって更に「意志的な自律移動イベント」と「非意志的な自律移動イベント」に分けられる。

- (1) 苏字的母亲起床后，沿着楼梯咚咚走下来。 【意志的な自律移動イベント】
(蘇字の母親は起床後、階段をドンドンと(歩いて)下りて来た。)(余华《在细雨中呼喊》)
- (2) [...], 空瓶子从他手中滑下来，掉在地上，摔碎了。【非意志的な自律移動イベント】
([...], 空き瓶が彼の手から滑り落ちて、地面で割れた。)(李晓明《平原枪声》)
- (3) 所以，所有死在高楼的逝者都要雇人从楼梯上背下来。 【使役移動イベント】
(従って、高層マンションで死人が出た場合は、人を雇い階段から背負って下ろして来なければならぬ。)(王朔《许爷》)

本論は全7章から構成されている。

第1章では、本論の研究対象、研究目的及び方法論について述べ、移動を表す述補構造(VD)についての概論を記述した。先行研究において方向補語の範囲や品詞、文法的意味及び当該述補構造の文法単位がどのように規定されているかを概観し、適宜問題点を指摘しながら本論の立場と定義を示した。

第2章では、意志的な自律移動を表すVDで表される3つの意味関係についての考察を行った。述語動詞(V)と方向補語(D)の時間的な意味関係に基づき、当該移動イベントを表すVDを「先行型述補構造」、「同時型述補構造」、「後発型述補構造」に分類し、各述補構造のVとDの意味関係を詳しく記述した。先行型述補構造では、VがDで表される移動を可能にする「手段」を表し、移動主体はVで表される動作行為を行うことによって自らの移動を実現するため、当該のVDは再帰的使役を介して移動主体の移動を指向する。同時型述補構造において、VはDで表される移動の「様態」或いは「付帯状況」を表し、VはDで表される移動の過程で継続する動作行為や状態を表す。後発型述補構造は、形式上先行するVが形式上後続するDに遅れて実現する姿勢を表すことになるため、当該のVDが表す意味関係は従来中国語の時間順序原則(the principle of temporal sequence)に則る類像性(iconicity)に反するものとされてきた。しかし、Vは単にDで表される移動が行われた後に実現する姿勢を表すのではなく、Dという移動を行う前提となる「目的」を表すものである。理想化認知モデル(Idealized Cognitive Model)に照らし合わせれば、後発型では「ある地点においてVで表される姿勢を実現するために(原因)引き起こされた移動(結果)」が表現され、Vで表される目的は理想化認知モデルを介して移動を引き起こす原因へと読み替えられる。従って、後発型は論理レベルにおける「原因—結果」の時間順序原則に則るものであることを主張した。

また、意志的な自律移動を表す3つの述補構造はいずれも「原因—結果」のスキーマを継承する形でネットワークを結び、1つの移動イベントカテゴリーを形成していることを明らかにした。

第3章では、事例研究として意志的な自律移動を表す「二音節動詞+“回来”」を取り上げ、述語動詞の意味が当該形式の統語的屬性や意味の解釈に与える影響について論じた。「二音節動詞+“回来”」という形式には統語的、意味的に異なる2つの解釈が存在する。二音節動詞が移動の「様態」を表す場合、形式全体は述補構造と理解され、二音節動詞が“回来”という移動の開始以前に終了した「デキゴト」として理解される場合、形式全体は述連構造となる。本章では、動詞が様態を表すか、デキゴトを表すかに基づき二音節動詞をV₀(様態)、V₁(デキゴト)、V₂(様態/デキゴト)に分類し、様態解釈では[+継続]の意味特徴、デキゴト解釈では[+目的]の意味特徴が2つの解釈の意味的な基盤となっていることを明らかにした。

「V₀+“回来”」は両義的であるため、当該形式がデキゴト解釈を受ける場合と様態解釈を受ける場合のコンテクストを考察した。結果、デキゴト解釈のコンテクストにおいて、V₂は①先行文脈に現

れる行為を指し示し、それをデキゴトとして提示する、と共に、②そのデキゴトによって生じる新たな事態を述べるために、その発端となるデキゴトを提示する、という2つの機能をもつことを指摘した。また、デキゴト解釈が仮定的事態、反事実的事態を表し得ないのに対し、様態解釈は仮定的事態、反事実的事態から自由であることが両者の顕著な差異として挙げられる。

「二音節動詞+“回来”」の様態解釈、デキゴト解釈には二音節動詞の「陳述性」(assertion)、「指示性」(designation)という側面が密接に関わっている。V_dは陳述性と指示性を兼ね備えた動詞であり、コンテキストによって動詞の陳述的側面が前景化した場合、当該形式は様態解釈を受け、指示的側面が前景化された場合はデキゴト解釈を受けることを指摘した。

第4章では、類型論的観点から非意志的な自律移動イベントの表現パターンについて考察を行った。当該移動イベントの言語化には[述語動詞(V)+方向補語(D)]からなるVD型枠付けパターンと、[方向動詞(V_d)+直示方向補語(D_m)]からなるV_dD_m型枠付けパターンが用いられることが指摘されている。コーパスを用いて両枠付けパターンが実際に使用される比率を調査した結果、VD型は全体の約77%を占め、V_dD_m型の使用は全体の約23%に止まるという数値が得られた。

有標のV_dD_m型には使用上の制約が課せられ、自然の力、移動を目的とした設計物、涙・汗、ことばといった[+自発的移動]の意味特徴を有する移動主体の移動を言語化する際に比較的用いられ易い。また、語用論的に見た場合、表現の簡潔性を満たすという動機が、より簡素な構造を有するV_dD_m型の使用を支えている。そのため、表現の簡潔性を要求する対準形式や四字形式ではV_dD_m型が多用される。更に、擬人法によって、非意志的な自律移動の言語化にV_dD_m型枠付けパターンが用いられることもある。

第5章では、自動詞(Vi)からなる述補構造(ViD)が使役移動イベントを表すケースについての考察を行った。従来、使役移動を表す述補構造の述語動詞は通常他動詞であるとされてきたが、実際にはViDが使役移動を表す場合もある。本章では本来他動性(transitivity)の極めて弱いViが、各コンテキストにおいて使役義を表すメカニズムについて詳しい考察を行った。

ViDが使役移動を表す場合、統語上では往々にして“把”構文が選択される。この現象は主に、Viで表される原因イベントと、Dで表される結果イベントの間の予測性が低く、両者が偶発的な因果関係を形成することに起因する。そのため、Dで表される結果イベントは往々にして情報の焦点となり文末の位置を占め、被使役者を表す名詞性成分は必然的に“把”を用いて提前されることになる。

Viは他動性が低いと、動詞本来の統語的、意味的特徴のみからでは所与のViが如何なる使役力を表すのかを判断するのが難しい。この問題を解消するため、使役移動を表すViDが生起するコンテキストでは先行文脈にVi(Vi2)と同様の動詞、もしくはは関連する意味を表す動詞(Vi1)が現れ、後方のVi2がどのような性質の使役力を表すかを明示化する役割を果たす。このように、ViDが表す非典型的な使役移動を効率的に理解するためには、コンテキストが提供する情報や我々の経験、世界に対する認識といった外在的要素の参与が必要となる。

第6章では、Talmyの類型論的理論枠組みを援用して、現代中国語の移動表現の特徴を考察した。Talmy1999、2000によれば、中国語は付随要素で経路概念を表す典型的な付随要素枠付け言語であるとされるが、中国語学界ではこの分類の可否について、いまだに統一的な見解が得られていない。本章では中国語を、①動詞枠付け言語に分類する立場、②等価枠付け言語に分類する立場、③典型的な付随要素枠付け言語ではないとする立場、④分裂型言語であるとする立場の主張に検討を加え、どの主張が中国語の特徴に最も合致するものであるかを分析した。また、中国語の移動表現の特徴をより明確に示すため、英語及び日本語における移動表現との比較対照を行いながら、英語と中国語、日本語と中国語の移動表現における異同を分析した。

本章では更に、VDの有界性についても部分的な考察を行った。先行研究では、起点や経過点を含むVDは有界性を表さない場合があると報告されている。この指摘に対し、本章ではVDが起点及び経過点を表す場所名詞を伴う「VD_m+L」の形式(後置式)を取り上げ、その有界性について考察を行った。Lが前置詞“从”によって導かれ、動詞の前方に位置する形式(前置式)との比較対照を行った結果、Lが起点や経過点を表す場合であっても、後置式は移動の完結性を明確に示し有界性を表すことから、VDの有界性の有無には語順という側面も密接に関わっていることを指摘した。

第7章では、本論の考察内容を総括し、本論に残された問題及び今後の課題について述べた。

本論文タイトルに含まれる「述補構造」は、「跳下来(跳ぶ+下降する+来る)」や「推出去(押す+外に出る+行く)」のようなものを典型とする。この構造において、「跳」「推」と「下来」「出去」は「因果関係」を構成しており、「下」「出」は異空間の転移を、「来」「去」は観察者の視点のありかを示す。本論文はこの構造における因果関係の多様性とイベント統合のメカニズムを、「跳」「推」の位置に生起する動詞の意味特徴を切り口に、詳細な意味的・構造的分析を通して解明したものである。

本論文は、執拗と思えるほどの徹底した用例調査を背景に、認知言語学、言語類型論、対照言語学の方法で議論が展開され、中国語の移動表現における多様な因果関係がどのような意味論的メカニズムによって一つの構造体として統合されるかを明らかにしている。本テーマに関する意味分析は、従来、辞書の意味分析に基づいて行われることが常態であったが、そのような分析では現実成立する多くの移動表現の中に移動を見出すことができないという欠陥があった。本論文はその限界を克服するため、フレーム意味論的視点を体系的に取り込んで、従来の視点では移動を見いだせないところに移動を見出し、最終的に事象全体が「述補構造」として統合される構文論的条件と意味論的動機を抽出することに成功した。

審査において、日本語学、英語学など他フィールドの研究者にも違和感のない記述を目指す必要性、及び「下」「出」等が代表する成分の分析が従来の枠に留まっていることが指摘されたが、本論文は当該テーマの多くの側面において従来の研究に新生面を切り開き、本研究科が博士論文に求める基準——継承性、新規性、実証性、論理性、明確性——を十分に満たしている。第六章「類型論的観点から見た中国語の移動表現」に見られる言語学的視野の広さに加え、すでに筆者の三篇の研究論文が全国規模の学会誌に掲載されていることも審査結果の妥当性を支持している。

上記評価に基づき、本審査委員会は、本論文が博士号(言語文化学)を授与するに相応しい業績であると判定した。